

今、私が思うこと

読谷中学校二年 我如古 美沙稀

「昔、おばあが若かったころ戦争があつたわけさあ。」

「夜は、バンバン音が鳴ってね、家の中に、穴をほって、その中にかくれたんだよ。」

「目の前で人が倒れてても、自分たちが逃げただけで必死だったから、だれも助けられなかつたんだよ。」

「とても苦しかったし、情けなかつたさあ。」

もし、私がおばあ の立場だったら、倒れて  
いる人に情けをかけるなど絶対に無理だろう。  
それに、こんな怖いことを思い出し、だれか  
に話そうなんて全く思わない、と考えながら  
おばあ の話を聞いていた。

おばあ の話はその後も続いた。

「あのころは、全てが地獄みたいに思えたんだよ。本当におそろしかったさあ。」

「あんたは、幸せだよ。この時代に生まれてきてよかつたね。」

話を聞いているときは気がつかなかったが、おばあは泣いていた。めったに泣いたりしな  
いおばあが泣いていた。それほど、いや、そ  
れ以上に恐ろしい出来事だったことがわかる。  
私は、おばあを悲しませ苦しませた戦争の  
恐ろしさを知るために、戦争についての本を  
読んだ。

一人の傷だらけの男の子が立っている写真  
があつた。服もボロボロで、血がたくさん出  
ていた。こんなに小さい子でも被害にあつて  
いたのだ。

もし自分がそこにいても、戦争の恐ろしい  
状況なら手を差しのべることができないだろ  
う。  
一人の女の子が泣いている写真があつた。  
この子のまわりには家族がいなかった。その  
子以外にはだれもいなかった。女の子は、す  
ごく寂しそうな表情をしていた。  
今なら手を差しのべることができると思う  
けど、本当にそこにいたら助けるどころか、

声もかけられず、逃げまわっているだろう。  
私は戦争を知らない。  
この先、時が経つにつれ戦争があったこと  
を語り継いでいく人は少なくなっていく。  
おばあが経験したことを私たちが聞いて、  
次の世代へと語り継いでいけば、戦争という  
残酷なことは起こしてはいけないという気持  
ちは伝わっていくだろう。  
私は戦争を知らない。  
だからこそ、戦争があったことを必ず伝え

ていこうと思う。  
人間の寿命は限られている。  
だからこそ、命を大切にしていって、一日一日を  
一生懸命に生きていこうと思う。  
戦争は一度起こってしまふと、多くの命が  
失われてしまふ。そんな戦争を二度と起こし  
てはならない。  
私は、おばあの話聞いて今がどれだけ幸  
せかを思い知った。私は戦争のない平和な今  
に生まれて良かったと思う。この平和は、お

ばあたちの悲惨な体験のうえに成り立って  
いる。だから、その平和で幸せな時間を大切に  
したいと思う。

ご飯を食べ、学校に行き、部活をして、友  
達と楽しくおしゃべりができて、家族とも安  
心して暮らすことができる。そんなことがで  
きなかった時があったことを忘れず、いつま  
でも平和な世の中が続くようにすることが、  
私たちの役割だと思う。